

『ローエンングリーンの死』における 体験話法

川口 眞理

1. はじめに

ハインリヒ・ベルの初期の短編のなかで『旅人よ、スパ...におもむかば』と『ローエンングリーンの死』（„Wanderer, kommst du nach Spa...“ „Lohengrins Tod“¹⁾）は内容、構成ともに非常に似通っている。ともに1950年に執筆され、前者は11頁、後者は12頁とほぼ同じ長さ、戦争の犠牲となる少年を主人公とし、病院を舞台に話が展開する。話はどちらも瀕死の重傷を負った少年が病院に担ぎ込まれるところから始まり、混濁した意識の中での少年の心情が語られ、最後に少年が亡くなる（その死が暗示される）ところで終わる。『旅人よ、スパ...におもむかば』（以下『旅人よ』）では主人公は戦場で両腕と片足を吹き飛ばされた少年兵であり、『ローエンングリーンの死』（以下『ローエンングリーン』）では戦後の廃墟の中で生活のために石炭を盗もうとして走る貨車から転落する戦争孤児である。作品の執筆に関わる直接的な関係は定かではないが、前者は戦場に赴いた少年の、後者は戦争に生き残った少年の悲惨を描いている点で内的な連続性はある。

二つの作品には語りの観点から見たときにも共通する大きな特色がある。登場人物の心情再現の手法として体験話法が多用されている点である。ベルの短編のなかでもこの2作品ほど体験話法を多用しているものは他に

1) 作品からの引用は Böll, Heinrich: Heinrich Böll Werke, ergänzte Neuauflage. Hrsg. von Bernd Balzer. Borheim-Merten/Köln (Lamuv Verlag/Kiepenheuer & Witsch) 1987. Romane und Erzählungen 1 に拠った。以下、同書からの引用は本文に頁数のみを示す。

はない。しかしそれが埋めこまれている物語形態は大きく異なる。『旅人よ』は少年自身が過去の自分の姿を語る一人称小説、対して『ローエングリーン』はいわゆる三人称の語り手が出来事を語る三人称小説なのである。したがって全体の物語状況、特に語り手との関係がその質を規定する体験話法の役割は、二作品において同種のものではありえない。

登場人物の行動や心理を語りの方によって積み重ねていく虚構テキストにおいて、語り手の作中人物や出来事に対するスタンスのとりかたとその変化は物語世界を根本的に規定し、作品解釈上重要な手がかりとなる。特に語り手と作中人物との視点が何らかの理由で重なる体験話法においては、その質と機能の分析は、単に作品の審美的価値の判断にとどまらず作品全体の解釈に深く関わることが多い。

筆者は前回の小論で『旅人よ』における物語状況の分析を行い、そのなかで一人称体験話法が物語で果たしている機能について検討した。²⁾今回は『ローエングリーン』を取り上げ、まずは語りの分析を通じて作品解釈の一つの可能性を探る。その後でそこで用いられている体験話法の機能と文体効果に関して考察を加え、ベルの短編技法の一端を明らかにしたい。

2. 物語状況の分析

結論から先に言えば、物語状況は全体としては人格化した語り手が後退した personal な語りに傾斜している。シュタンツェルの類型円図表でいうなら、局外の語り手による物語状況と作中人物に反映する物語状況のほぼ中間領域、情景描写のあたりから personal な方向へ向かう領域に位置付けられよう。³⁾ そのなかで語りの様態は、話の起承転結にほぼ対応する形で微妙に変化していく。まず少年が病院に担ぎ込まれ初期手当てを受けるまでは外的視点による外界描写が主である。続いて強力な麻酔で一時的に落ち

2) 川口眞理：隠された怒り——『旅人よ、スパ…に赴かば』の語り——（『研究論集』第3号 学習院大学ドイツ文学会 1999, 141-158頁）

3) Vgl. Stanzel, Franz K.: Theorie des Erzählens. 4. durchgesehene Aufl. Göttingen (UTB 904) 1989. S.242ff.

着きを取り戻した少年と、尼僧、看護婦との間で会話が交わされ、少年の出自や重傷を負った事情が明らかになる。そこでは直接話法による対話と所作の簡単な報告からなる場景描写が中心となる。尼僧たちが別の子供の様子を見に部屋を離れてからは語りの様態が大きく変わり、家に残してきた幼い弟達を気遣う少年の心情が数頁にわたり体験話法で切々と語られる。尼僧が部屋にもどってきてからは再び地の文が外界描写へと転じ、切迫した容態に狼狽した尼僧が少年に授ける洗礼と、その直後の少年の死とが語られる。

こうした語りのなかで主人公の少年のみならず他の人物達の内面も体験話法で再現される。しかしこれらの人物達と少年の体験話法とは、量の上からも地の文との関係から考えてもその機能は明らかに異なっている。まずは少年以外の人物達に用いられている体験話法の特徴とその機能を、物語状況との関連のなかで考察する。

2.1 医師たちをめぐる語り

『ローエングリーン』にはその名を持つ主人公の少年のほかに、担架の運び手2名、若い医師、夜勤看護婦、尼僧の5人が登場する。そのうち看護婦以外はその心の内が体験話法で語られる箇所があり、そのほとんどが物語の冒頭部に集中している。そこでは医師と運び手たちに対して体験話法ないしそれに近い内面描写が数回、外的描写の地の文のなかに挿入される。まず冒頭部では担架の運び手たちの内面描写がある。

① Die Treppe hinauf trugen sie die Bahre etwas langsamer. Die beiden Träger waren ärgerlich, **sie hatten vor einer Stunde schon ihren Dienst angefangen und noch keine Zigarette Trinkgeld gemacht, und der eine von ihnen war der Fahrer des Wagens, und Fahrer brauchen eigentlich nicht zu tragen. Aber vom Krankenhaus hatten sie keinen zum Helfen heruntergeschickt,**

und sie konnten den Jungen doch nicht im Wagen liegen lassen; es war noch eine eilige Lungenentzündung abzuholen und ein Selbstmörder, der in den letzten Minuten abgeschnitten worden war. Sie waren ärgerlich, und plötzlich trugen sie die Bahre wieder weniger langsam. (S.548)

階段ののぼりになって、彼らは担架を少しゆっくりと運んだ。担ぎ手はどちらも腹を立てていた。彼らはもう1時間前から勤務に着いているのに、まだ煙草一本のチップももらってなかった。それに彼らの片方は車の運転手だったし、運転手は本来担架を運ぶ必要はない。でも病院の連中は手伝いを誰も下ろしてよこさなかったし、かといって、この男の子を車のなかに寝かしておくことなど、できはしなかった。まだほかにも急ぎの肺炎患者を一人、それに、ぎりぎりのところで助けられた自殺未遂者を一人連れてこなければならなかった。彼らは腹を立てていた。急にまた彼らは担架を運ぶ足を少し速めた。
(日本語訳、字体の変換、下線は筆者による。以下同様。)

ここには最初担架の運び手たちを sie と呼んでまず die Bahre のほうを焦点化し、次に sie が die beiden Träger であることを明かして今度はそちらを焦点化させるような、語る能力を備えた三人称の語り手が存在する。彼は二箇所で繰り返される sie waren ärgerlich の間で運び手の立腹の事情を読者に伝えている(引用①：ボールド体)が、その際それを運び手たち自身の内面に近い言葉で語っている。たとえば herunterschicken のような運び手の視点からの空間把握を示す動詞、助勢詞 doch の使用、den Jungen という少年に対する定冠詞を用いた呼称(下線部)などがそうである。とくにコミュニケーションの場において既知の存在であることを表す定冠詞の使用は、こののち語り手が少年を不定冠詞つきで、すなわち読者とのコミュニケーションにおいては未知の情報として物語に導入している(引

用②) こととの対比で考えれば、den Jungen を含む文が運び手たち自身の内面で発されたものであったことを示している。

② Da er sich dabei umgewandt hatte, stieß er hart gegen die Türfüllung, und der, der auf der Bahre lag, erwachte und stieß schrille, schreckliche Schreie aus; es waren die Schreie eines Kindes. (S.548)

そう言いつつ振りかえたので、彼はドアの鏡板にしたたかにぶつかった。すると担架に寝ていた男が目を明け、つんざくようなすさまじい叫び声を挙げた。それは子供の声だった。

したがって冒頭部における運び手の描写は体験話法ではないものの、運び手の内面に寄り添ったために語り手の言葉が彼等の言葉に感染したものと見える。ところが一旦担架が運び込まれると、こうした語りは今度は医師にその描写の焦点を移し、医師の内面が体験話法で再現される。(引用③：ポールド体)

③ „Ruhig, ruhig“, sagte der Arzt, ein junger mit einem studentischen Kragen, blondem Haar und einem nervösen Gesicht. Er sah zur Uhr: **Es war acht Uhr, und er müßte eigentlich längst abgelöst sein. Schon über eine Stunde wartete er vergebens auf Dr. Lohmeyer, aber vielleicht hatten sie ihn verhaftet; jeder konnte heute jederzeit verhaftet werden.** Der junge Arzt zückte automatisch sein Hörrohr, [...] (S.548)

「落ち着いて、落ち着いて」と、大学生風のカラーを身につけた、金髪で神経質そうな顔つきの若い医師が言った。彼は時計を見た。8時

だ。じゃあ本来ならとつくに非番になってるはずなのに。もう1時間も以上もローマイヤー博士を待ってるのに来ない。では奴らは彼を逮捕したのかもしれない。いまどきは誰がいつ逮捕されたっておかしくない。若い医師はさっと自動的に聴診器を取り上げた。

引用は割愛するがこののちにも再び運び手に対して1回、医師に対して1回、同じような地の文の流れの中で体験話法が用いられている。⁴⁾ 周知のように、物語の導入部においては物語世界の呈示のありようによって読者の読みの姿勢が規定される。したがってこの部分にはやくも投入された体験話法はことに、語り手がどこに〈いま・ここ〉を据え、どのような伝達様式をとろうとしているのかという問いとの関連で考える必要がある。

ここでの三人称の語り手は、明らかに物語世界の外から出来事の内容や時間を自由に操作するような、allwissendで人格化された存在ではない。かといって特定の作中人物を映し手とするほど後退しているわけでもない。医師の外見描写（引用③：下線部）のように読者に対する報告機能はきちんと果たしている。しかし一方で出来事は語られた世界の時間的・空間的な推移に忠実に再現され、描写の際の視点は担架の少年の移動に伴って最初は運び手に、次に医師へ、また再び運び手の一人へと移っていく。このような人物間での外的描写の視点の移動と、それに伴って挿入される体験話法による内面描写は全体としてどのような語りを生み出しているのだろうか。

三人称小説においては一般に体験話法は語り手の作中人物への何らかの動機での接近、多くは感情移入を前提とする。しかしここでは物語はまだ始まったばかりで、しかも運び手や医師は主人公の少年に関わる周辺の人物にすぎない。そこで再現される心の動きも彼らの置かれている状況を読者が知る手がかりにはなっているものの、物語の展開にとっては本質的

4) Böll: *ibid.* S 549 Z.18-23 S.551 Z.20-26.

なものではない。したがってこれら脇役達への体験話法は、語り手の感情的な動機に基づくというよりはむしろこの話法の持つ二重視点の語りの効果から説明されるべきだろう。すなわち、出来事の展開にしたがって事件に関わる周辺の複数の人物の内面に次々と視点を重ねていくことで、語り手の〈いま・ここ〉が特定の個人ではなく出来事の生起する現場そのものにあり、その成り行きを周辺の人物たちと同じ目の高さで目撃していることが暗示されるのである。本来存在論的自由を持つ三人称の語り手にとってこうした立場は、語られた世界の時空間に自らの存在を閉じ込めることにはなるが、一方で複数の人物の内面に自由に出入りできるという限定的全知の能力は保持できる。つまり出来事の先は読めないがその場の状況は人物の内も外も見とおせる透明の目撃者に扮することができるのである。作中人物より少し優位に立つ周辺の目撃者、それは読者にとっても物語に入りこみやすい魅力的なスタンスである。ここでは体験話法により語り手の無名の目撃者への〈作中人物化〉が生じているのである。こうした一種の擬態によって語り手は、特定の人物の背後に隠れることなく、また特定の視点に限定されることなく、その主観性を内に秘めたまま出来事の状況全体を自らに映し出す場を獲得する。すなわち見せ掛けの客観性を装うことが可能になるのである。

2.2 ローエングリーンをめぐる語り——①

では主人公の少年、ローエングリーンはどのように語られるのだろうか。まず物語の前半と後半とではその描かれ方は大きく異なる。前半では上述したように現場の無色透明な目撃者としての視点から、少年は外から窺い知れる様子のみが描写される。直接話法でも間接話法でも彼自身の声が読者に伝えられることはまだ一切ない。医師、看護婦、そしてその背後に影を潜めた語り手にとって少年はまだ匿名の重症患者にすぎないことが窺える。

④ その子供はまだ叫びつづけていた！ 彼らは足から毛布を巻き
とってすばやく運転手に渡した。医師と看護婦は顔を見合わせた。子
供はぞっとするような姿だった。下半身は血の海でリンネルの半ズボ
ンはボロボロにちぎれており、それらの布切れに血がついて身の毛も
よだつような塊と化していた。両方の足ははだしだった。少年はひっ
きりなしに泣き叫んでいた。恐ろしいほど長々と繰り返しては泣き叫
んでいた。(S.549)

一見すると客観的な状況描写のようであるが、そこにはひそかに語り手
自身の印象や判断が織り込まれている。例えば少年の叫び声を「恐ろしい
ほど長々」と形容しているのは語り手に他ならない。引用箇所のほかにも
「そのためだけに生まれたかのように泣き叫んでいた(S.550)」「まるで少年
の額に当てられた冷たい手の重みによって落ち着きを取り戻したかのよう
であった(S.550)」「眼には奇妙な幸福感があった。注射が素晴らしく効果
をあげたに違いなかった。(S.551)」と、あちこちで語り手自身の主観に基
づく描写が挿入されている。とはいえそれは語り手の存在を際立たせるこ
とはない。透明な目撃者としての語り手の抱く印象は、その場の人物達の
集合的な印象として共有されているからである。

少年自身の肉声が読者に届くのは、カルテをつくるために尼僧と看護婦
が少年に質問し始めてからである。その対話のなかで、少年は1933年生ま
れのローエングリーンという名で洗礼は受けていないこと、母は亡くなり
父と兄は不在で、幼い弟たち二人が彼の帰りを待っていることなどが明ら
かになる。出来事を中心ではあるものの匿名の存在に過ぎなかった重症患
者はようやく具体的な輪郭を持って読者の前に姿を現しはじめる。

2.3 ローエングリーンをめぐる語り ― ②

さて、尼僧が医師に呼ばれて他の危篤患者のために部屋を去ると、語り
の様態は大きく変わる。それまでの外的描写から今度は少年の内面のみが

語りの対象になり、地の文による内面の報告と体験話法による思考の再現部とが何度も交錯しながら少年の心理を描き出していく。まずは語りの様態が変化する部分から追ってみよう。

⑤ しかし彼らが皆外に出してしまうと、彼はただただ涙が流れた。それはまるで額に置かれた尼僧の手が涙を留めていたかのようだった。苦痛のためではなかった、幸せのあまり泣いていた。でもやはり苦痛や不安のためでもあった。小さな弟達のことを考えたときだけは痛みのために泣けた。だから彼は彼らのことを考えるまいとした。幸福感で泣きたかったからだった。(S.554)

「まるで額に置かれた尼僧の手が涙を留めていたかのようだった」の部分は前述の外的視点からの語り手の印象と同種であるが、そののち語り手は少年を対象として外から眺めるそれまでの姿勢を変えてその内面に踏み込み、激痛が癒えたあとに彼に訪れた奇妙な幸福感について説明し始める(引用⑤：ボールド体)。こうした描写内容の変化はその直後から始まる長い体験話法を導入する役割を果たしている。(引用⑥：ボールド体)

⑥ aber er mußte doch immer an die Kleinen denken. **Hubert würde vor morgen früh nicht zurückkommen, und Vater kam ja erst in drei Wochen, und Mutter...und die Kleinen waren jetzt ganz allein, und er wußte genau, daß sie auf jeden Tritt, jeden geringsten Laut auf der Treppe lauerten,[...]** (S.554)

しかし彼はやはり弟達のことを思わずにはいられなかった。フーベルトは明日の朝まで戻らないだろう、それにお父さんは三週間後でないと戻ってこない、そしてお母さんは... それからチビたちは今二人つきりだ。階段のどんな足音にも、どんな小さな音にも耳を澄ますこと

はよくわかってる (...)

„mußte...denken“ と、その思考内容があとに続くことを示唆する導入的表現、主文形式での würde+不定詞が意味論的に接続法ではなく直説法未来として使用されていること、何よりも内容が直説法での少年の言葉に還元しうることなどから、ここが体験話法であることがわかる。⁵⁾少年はこうした調子で、今この瞬間も自分の帰りを待ちつづけている幼い弟達の孤独と空腹とを案じ、今日貨車から無煙炭をくすねようとしてルクセンブルク兵から発砲されたときの状況を回想する。しかし最初はまとまりをもっていたその思考は徐々に時間的・空間的脈絡を失い始める。たとえば注射で痛みが消えて幸福感が訪れたことを少年は「看護婦が注射器のなかに幸福をいれた」と思いこみ、その幸福を弟達にも分けてやりたいと何度も願う。また「グリーニィ」という名が「イ」を二つ伴うこと、洗礼を受けていないと話した尼僧との会話の断片が何度も想起される。今や幻覚と変わりつつあるこうした想念は次のように再現される。

⑦ Die Spritze tat gut, er fühlte den Piek, und dann war plötzlich das Glück da! Diese blasse Schwester hatte das Glück in die Spritze getan, und er hatte ja ganz genau gehört, daß sie zuviel Glück in die Spritze getan hatte, viel zuviel Glück, er war gar nicht so dumm, Grini mit zwei i... nee, ist ja tot... nee, vermißt. Das Glück war herrlich, er wollte vielleicht den Kleinen mal das Glück in der Spritze kaufen; man konnte ja alles kaufen...Brot...ganze Berge von Brot...

Verdammt, mit zwei i kennen sie denn hier die besten deut-

5) この箇所の体験話法の統語論的特徴については次の論文を参照されたい：Suzuki, Yasushi: Würde + Infinitiv in „Wo warst du, Adam?“-Zur These von Elis Herdin-S.28f. (『言語文化論集』第27号 筑波大学1988 27-40頁)

schen Namen nicht?...

„Nix“, schrie er plötzlich, „ich bin nicht getauft.“

Ob die Mutter nicht überhaupt noch lebte? Nee, die Luxemburger hatten sie erschossen, [...] einen ganzen Berg Brot wollte er den Kleinen kaufen...Brot in Bergen...einen ganzen Güterwagen voll Brot... voll Anthrazit; und das Glück in der Spritze.

Mit zwei i, verdammt!

Die Nonne lief auf ihn zu, griff sofort nach dem Plus und blickte unruhig um sich. [...] sie rannte um das Ledersofa herum...

„Nix“, schrie das Kind, „ich bin nicht getauft.“ (S.557-558)

(ボールド体：体験話法 ボールドイタリック体：内的独白 下線：直接話法)

注射はよく効いた、チクツと感じたけどそのあと急に幸福がやってきた！あの青白い顔した看護婦さんが注射に幸福を入れてたんだ、だって注射に幸福を入れすぎたってちゃんと聞こえたんだから、幸福が多すぎたって、僕はバカなんかじゃない、イが2個つくグリーンニイなんだぞ... いや、死んじゃった... そうじゃない、行方不明だ。幸福っていいな、チビたちに一度注射器に入った幸福を買ってやりたいな。何だって買うことができるんだから...パン...山のようなパン...ちくしょう、イが2個つくんだぞ、いったいこの人達はドイツで一番いい名前を知らないのかな?...

「宗派はないよ」と突然彼は叫んだ。「僕は洗礼を受けてないんだ。」

だいたいお母さんはまだ生きてるんじゃないのかな？ いや、ルクセンブルク兵がお母さんを撃ったんだ、(中略)山ほどのパンをチビたちに買ってやりたいな。山のようなパン..貨車一杯のパンを...貨車一杯の無煙炭、それに注射器に入った幸福を。

イが2個つくんだぞ、ちくしょう！

尼僧が少年に走りより、すぐに脈をとって不安げにあたりを見まわした。(中略) 彼女は皮張りのソファのそばをうろうろと走り回った。

「宗派はないよ」と子供は叫んだ。「僕は洗礼を受けてないんだ。」

注射器に入った幸福、イが2個つくグリーニィ、山ほどのパン、洗礼を受けていない、など少年の意識を駆け巡るこれらの言葉は、断片と化してももとの脈絡すべてを内包した密度の濃い言葉として、緊迫感をもって読者に迫ってくる。そのなかで「宗派はないよ、僕は洗礼を受けてないんだ」という言葉だけが心のうちの声ではなく、少年の口から実際に発せられた声として体験話法による内面描写の連続のなかに現れる。この直接話法での引用には語り手の意図的な選択が感じられる。というのも、尼僧が部屋にもどってきて語りが再び外界描写に転じたときに次のような少年の外の声が引用されるからである。

⑧「パン... 山ほどのパンをチビたちに... チョコレート... 無煙炭... ルクセンブルク兵、あの豚ども... 撃つんじゃない、くそっ、じゃがいもは、おまえ達、じゃがいもは出してかまわないんだ... さあ、じゃがいもを出しといで。グロースマンさん... 父さん... 母さん... 兄さん... ドアの間から、ドアの間から。」(S.558)

この箇所から、それまで読者が覗き込んでいた少年の思考が実際に口から出た言葉としてはとぎれとぎれのうわ言であったこと、内面描写のなかでは必ずしもはっきりしなかった彼の容態は実はかなり重篤なものであったことが明らかになる。したがって一人でいるときも少年はさまざまうわ言をいていたはずであり、そうした少年の外の声から語り手はわざわざ「洗礼を受けてない」だけを特に選んで体験話法による内面描写の連続のなかに挿入しているのである。⁶⁾あるいは彼の意識のなかからこの言葉のみを拾い出したとも言えるだろう。なぜそうした再現形式の切り替えを

あえて行ったのか。単にその言葉だけを少年が大声で言ったということだろうか。たしかにこの後、彼のこの言葉に突き動かされて尼僧は息を引き取る直前のローエングリーンの洗礼を受ける。しかし決して出来事の展開上の必要性から語り手がこの言葉を直接話法で強調したのではないことは、内面描写以前の先の尼僧との対話のなかで、語り手が唯一見せた語りの破綻の箇所とあわせて考えるとよくわかる。

- ⑨ 少年はもう一度繰り返して「グリーニィ」といった。彼はローエングリーンの名前だった。それは彼が生まれた 1933 年はバイロイト音楽祭で初めて臨席したヒトラーの姿があらゆるニュース映画の画面に流れたところだったからである。しかし彼の母はいつもグリーニィと呼んでいた。(S.553)

ナチ政権誕生の年に生まれ、ゲルマン神話の英雄の名を授けられた彼は、ナチの軍国教育の理想を正しく背負ったという意味で「時代の申し子」である。その事実をここでは、それまで後退していた語り手が突如全知の立場をとり、対話というきわめて場景的な描写の流れを遮ってまで言及している。現場に影を潜めた目撃者という立場を捨て、語られた世界の時空間を踏み外してまで語り手が注釈を加えるのは、物語中この箇所だけである。語りの流れの破綻を起こしてでも言及せずにはいられなかった少年の名前とそれが持つ時代的意味、そして語りのなかでことに強調された「洗礼を受けていない」という少年の声、さらに洗礼を受けた直後に亡くなるという事件の顛末は、少年の短い生涯に二つの相対する力が関わっていたことを示している。一方の極にはこの時代に生を享けた子供たちに選択の余地なく押し付けられたファシズムの理念があり、もう一方の極にはファシズ

6) 部屋に戻ってきたばかりの尼僧の視点からもローエングリーンは「このうなされている子供」(S.558)と描写される。したがって少なくとも体験話法による内面描写の最後のほうでは少年は様々なうわ言を口にしていたであろうことが推測される。

ムのもと封じ込められていたキリスト教精神がもたらす救いがある。この両極間で生じる緊張が少年の事故死という事件に対してイローニッシュな視点を与えている。つまり読者の共感を誘うのは、決して体験話法で綴られる哀れな少年の心情そのものではない。彼らの感情を真に揺さぶるのはむしろ、否応なく戦争に向けて育てられた少年たちが直面した悲惨な運命と末期のわずかな救い、という逆接的な現実のほうである。この語りの戦略が生み出すイロニーのなかではじめて「僕は洗礼を受けてない」という言葉は単に彼の個人的事情であることを超えて、時代を告発するメッセージとして響くのである。

3. ローエングリーンをめぐる体験話法の役割

さて、以上の分析により物語状況の推移と特徴は明らかになったと思われる。そこで次にローエングリーンの心情再現に用いられた体験話法の機能についていまま少し考察を加えたい。心情再現の手法としては体験話法のほかにも間接話法と内的独白とがある。それらとの競合の上で、なぜここでは体験話法が選択されているのだろうか。

まず間接話法が用いられなかった理由は簡単に推測できる。一つにはまず、地の文が局外の語り手と映し手とのほぼ中間領域に位置するものの、auktorialな方向にではなく personal な語りへの傾斜を見せていたこと、すなわち語り手の顕在化を印象づける間接話法とは逆の志向性を持っていたことがある。もう一つにはもし少年の心の声語り手の座標系から接続法を用いて副文形式で再現されたなら、発話の生彩さが著しく損なわれたであろう点が挙げられる。⁷⁾ しかもその心の声は数頁にもわたる長大なものであるから、たとえ伝達部欠如の独立文形式を用いたとしても、間接話法の連続では登場人物との距離感がにじみでて報告口調となり切々とした

7) 発話の生彩の保持能力の比較に関してはシュタインベルクの講演原稿を紹介した保坂の論文に簡潔な解説がある。保坂宗重：G.シュタインベルクの体験話法研究（茨城大学教養部紀要 第16号 1984 189-209頁）207-208頁。

少年の心情は再現できないであろう。ではその点内的独白はどうであろうか。内的独白なら伝達動詞と引用符以外は直接話法と同じであるから、オリジナルな発話の形式が最もよく保たれ、読者は苦悩する少年の内面を直接覗き込むことができるはずである。物語状況とも決して矛盾はしない。ではなぜ内的独白が用いられなかったのだろうか。

まずは語り手自らが登場人物の声に自身の声を重ねることからくる読者をひきこむ体験話法の力が挙げられるだろう。ここでは、上述したように老若男女を問わず過酷な生存競争に晒された戦後の荒廃の一例が子供の口を通じて語られる。その際に読者の共感をさらに高めるべく、読者の感情移入を誘う体験話法が好まれたということはまず指摘できよう。

また地の文と体験話法とのつながりの良さもここでは重要な要因であったと思われる。体験話法は内的独白と同様、想定される直接話法の形式は保持されるが、時称・人称の変換が行われる点で地の文に同化している。そのために、ここでは地の文による内面描写と体験話法との間で行われる数度の切り替えが違和感なくなじみ、しかも長大な心の声の連続が冗長に陥ることがない。むしろ地の文による幸福と涙についての描写の挿入が体験話法での心情再現を引き締めるように働いて、緩やかな波のような語りのリズムが形成されている。これがもし内的独白であれば、地の文との境界で〈いま・ここ〉の急激な移行と声の切り替えが強く読者に意識され、内面描写の全体としての緩やかな連続体はつくられないであろう。

次いでここでの体験話法の特徴としていま一つ指摘しておきたいのは、直接話法での少年の肉声との間に強いコントラストを生じさせる効果である。「いや、宗派はないよ、僕は洗礼を受けてないんだ」という少年の外に向けたこの声は、内の声のほかならぬ体験話法によって再現されていることにより非常に強く際立たせられている。もしこれが内的独白であれば、読者に聞こえてくるのはどちらも登場人物の〈いま・ここ〉からの少年自身の声となり、全体としての臨場感はあるとも両者の間でそれほど強い緊張が生じることはない。しかし体験話法と直接話法とでは声の種類もそれ

が発せられる座標軸も異なる。体験話法は少年の声に語り手の声重なったものであり、地の文も含めて物語の時間軸から発せられるそうした声長く続いたあとの少年自身の肉声は、カーテンが急に取られ一瞬にのみ差し込む日差しのように、鮮明な印象を持って読者の耳に届くことになろう。つまり少年の内と外との声を、発話のオリジナルな形式はできるだけ保持したまま、しかしできるだけ強い対比、落差をもって表現するために体験話法が選択されたのではないだろうか。⁸⁾ もちろんそれは少年の心情を生き生きと伝えるためでもあろうが、それ以上にここでは語りの上でのキーセンテンスを浮き彫りにするための手段、「洗礼を受けてない」を際立たせるための長い影の部分として機能しているのではないだろうか。

4. 結び

『ローエングリーン』も『旅人よ』の主人公の少年も、彼ら自身について読者に伝えられる情報は決して多くはない。しかしそのなかで両者ともに言及されているある特徴がある。ナチの軍国教育を象徴する言葉との関わりである。『旅人よ』の少年兵は自分が担ぎこまれた病院の黒板に、かつて自分が書いた戦死礼賛のスローガンを見つけてそこが母校であったことを知る。一方『ローエングリーン』に関しては前述した通りである。ちなみにローエングリーンの弟の一人はアドルフという。両作品はともにナチの表象を背負った少年を主人公とし、それを悲惨な末期と対比させることで戦争を告発する。その際双方ともに体験話法が重要な役割を果たしているが、その機能は全く異質である。一人称小説の『旅人よ』では体験話法は内的独白と連携して用いられ、〈体験する私〉の口を借りて〈語る私〉自身

8) 引用⑦にみられるように、„Nix, ich bin nicht getauft!“ の第1回目の挿入の直前の内面描写は実は内的独白となっている (Verdammt, mit zwei i, kennen sie denn hier die besten deutschen Namen nicht?...). この内的独白は体験話法から直接話法への移行する際の間形態といえる。しかし一方で少年が自らの名を「ドイツでもっともよい名前」と自負するその内容から考えると、語り手は「洗礼を受けてない」とともに戦略的にこの部分も少年の直接的な声で強調したものとも思われる。

が最後に告発の声を挙げるための手段であった。⁹⁾ こちらでは上述したように、体験話法は、一つは語り手の作中人物への擬態のために、もう一つは少年のたった一言の肉声を際立たせ、前景化させるための後景の部分として大胆に使われていた。テーマ、構成ともに非常に共通点の多い作品ながら、ベルの技法は多様である。

ベルの初期の短編は、戦中戦後を経た人間なら誰でもが身近に体験し得た出来事をリアルな筆致で描き出す。戦後まもない短期間のうちに連作されたそれらの作品群は、対象へのあまりの距離のなさから個々人の戦争体験の写実的記録のような印象さえ与える。「廃墟の文学」を自負するベルにとってはむしろそれこそがこれらの作品の身上であろう。とはいえそこにはすでに、語るだけでも読者の共感を誘うような素材に頼ることなく、そこに緊密な構成を与えて風刺やイロニーを織り込むのちのストーリーテラー、ベルのたしかな短編技法の萌芽が垣間見えるのである。

9) 川口；ibid.155頁

Erlebte Rede in „Lohengrins Tod“

Mari Kawaguchi

In diesem Aufsatz wird die Funktion der Erlebten Rede (ER), die in „Lohengrins Tod“ Heinrich Bölls häufig auftritt, im Zusammenhang mit der Erzählsituation analysiert.

Die Erzählhaltung schwebt im Bereich der personalen Erzählsituation, d. h., zwischen der szenischen Darstellung und dem Auftritt der ER. Darunter kommen die ER zu den Nebenfiguren konzentriert am Anfang der Geschichte vor. Zwar tritt die ER in allgemeinen oft mit der Einfühlung des Erzählers in den Charakter auf, aber bei mehreren Nebenfiguren im Erzählbeginn ist solche Motivation schwer zu vermuten. Man sollte in diesem Fall eher auf die Erzählwirkung der doppelten Perspektiven der ER achten: In der ER deckt sich die Erzählerperspektive mit der Figurenperspektive. Damit wird ein Eindruck hervorgebracht, dass der Erzähler nicht hinter einem bestimmten Reflektorfigur, sondern direkt an Ort und Stelle, wo sich der Vorfall jetzt ereignet, steht und als ein unsichtbarer, anonymer und halbwissender Beobachter sowohl die Innenwelt als auch die Außenwelt zu sich reflektiert. Diese Personalisierung des Erzählers bietet ihm eine Chance, seine Subjektivität zu bedecken und die fungierte Objektivität zu erwerben.

In der Klimax ist die ER nun für die dauernden Gedankenwiedergabe vom Hauptfigur, Lohengrin benutzt. Bemerkenswert ist dabei, dass aus seinen verschiedenen Innenäußerungen nur „Nix, ich bin nicht getauft!“ als seine äußere Stimme in der Direkten Rede wiedergegeben

und in die lange ER eingeschoben ist. Dieser unerwartete Wechsel des Wiedergabemittels ist wohl absichtlich. Außerdem ist im Erzählen noch eine auffallende Abweichungsstelle zu finden. In der szenischen Darstellung tritt der Erzähler plötzlich in Erscheinung und erklärt dem Leser den Herkunft des Namens „Lohengrin“ in der Nazi-Zeit. In der Spannung zwischen den beiden Erzählabweichungen hebt sich eine Ironie hervor: Das ist das paradoxe Schicksal, das ein Kind, das von seinem Geburt unwiderstehlich das Merkmal vom Faschismus bei sich trug, traf und schließlich zum armen Tod zwang.

Zur Funktion der ER zu Lohengrin könnte man drei Punkte nennen. Erstens: die starke Einfühlungskraft der ER. Zweitens die gleitenden, unauffälligen Übergänge zwischen dem Innenbericht und der Gedankenwiedergabe durch die ER. Drittens: ein Erzähleffekt der ER, zu seiner Stimme in der Direkten Rede ein starkes Kontrast zu bilden. Im Vergleich mit der Indirekten Rede und dem Inneren Monolog eignet sich die ER dafür, die Innenäußerungen mit dem möglichst starken Kontrast zur äußeren Stimme wiederzugeben, ohne die originelle Form der Rede nicht so stark zu verändern. Hier funktioniert die ER als Hintergrund, um die äußere Stimme des Jungen in den Vordergrund zu rücken und thematisieren. In dieser Erzählstruktur könnte Lohengrins Schrei „Nix, ich bin nicht getauft!“ als die Kritik am Faschismus auf dem Leser wirken.